
恋する魔剣士

不協和音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する魔剣士

【Nコード】

N6719X

【作者名】

不協和音

【あらすじ】

勇者に恋する魔剣士ギルティアには決してしられない秘密があった。

魔剣士ギルティア

私は勇者が好きだ。

誰にでも優しい所とか、頑張りやな所とか、直ぐにムキになる所とか、言い出すときりがない。

だけど、この思いは伝える事は多分一生ないし、誰にも知られる事もない。

私は勇者の仲間の魔剣士だ。勇者とは幼なじみで剣の腕は一緒に上げてきた、お互い信頼しあっている、勇者にとって親友みたいな物だ。

それ以上でもそれ以下でもない…

「ギルティア、剣の稽古に付き合ってくれてもいいか？」

勇者のアレンが言った。

「良いよでも手加減しないからな。」

ギルティアは挑戦的に言った。

「のぞむところだ！」

アレンは満面の笑みで答えた。

“ キン カン キンキン ”

辺りに剣の音が響いた。あれから直ぐに剣の稽古を二人は始めた。

二人の打ち合いは激しく、二人の稽古を見ている、他の仲間が早く終われよと野次を飛ばす程だ。

“ キン ”

勝負は一瞬で決まった。ギルティアがアレンの剣はじき、アレンの剣が二人より1メートル先に突き刺さった。

「私の勝ちだなアレン」

ギルティアは剣の先をアレンに向けながら言った。

「くっ…次は僕が勝つ」

アレンは悔しそうに言った。

「このメスゴリラ、アレン様に何するのよ」

割って入って来たのは白魔導師のリリーだった。

「誘ったのはアレンだ。」

ギルティアはそうリリーに言いその場から離れた。

ギルティアは離れる際にチラリとアレンの方を見るとリリーが回復魔法をアレンにかけている。アレンはリリーに礼を言い二人は楽しそうに笑いあっている。

“ズキッ”

ギルティアは胸の奥に痛みが走った。

（駄目駄目だ！好きになつたら駄目なんだ。）

そうギルティアは自分に言い聞かせる。

だが、この胸の痛みは消えない…ズキズキと痛む。

ギルティアは幼い頃から秘密にしている事があった。

それは誰にも知られてはいけない事、特にアレンには知られたくない事だった。

（私は魔王の娘なんだ。私はその気はなくてもアレンや皆にとって
は…）

テ
キ
ナ
ン
ダ

魔王の娘

”魔王の娘”

ギルティアがこの事を知ったのは、ギルティアが6歳の誕生日を迎えたばかりの頃だった。

10年前

「おかあさん、どうしようへんだよギルはどうなっちゃったの？」

ギルティアは泣きながら母親のマリアに泣きついた。

マリアはギルティアの姿を見て驚いた。

「ギルいつからそうだったの？」

「わかんないわかんないよ」

ギルティアの姿は人間ではなくなっていた。

髪の色は綺麗な黒色だったのが白銀に変わっていた。

瞳の色は赤色だったのが、右目が緑、左目が青色に変わっていた。

極めつけは肌の色と耳、肌の色は魔族特有の透き通るような白い肌、耳も魔族特有のとんがった耳をしている。

「ごめんねギル、お母さんギルにずっと黙っていたことがあるの・・・」

マリアは真剣な表情で言った。

「ギルはお母さんとお父さんの子供じゃないの」

マリアはゆっくりとギルティアに分かりやすく話し始めた。

マリア

マリアは夫とアレンの両親と魔王を倒す旅に出ていた。

しかし、マリア達は魔王を倒す前に魔王の2番目の子供ジルバに敗れた。

ジルバはマリア達を殺したと思いその場を去ったがマリア達は瀕死の状態だが生きていた。

そこに現れたのが魔王の一番目の子供アンだった。

アンは助けてあげる代わりに条件を一つだけ出した。

魔王の6番目の子供、ギルティアを預かって欲しい。

アンは理由も言わずまだ生まれたばかりの子供をマリア達の前に置きマリア達に回復魔法をかけてその場を去った。

マリアはこの事をギルティアに長い時間をかけてゆっくりと説明した。

ギルティアは理解するのに苦労していたみたいだったが理解が出来たみたいで、マリアに質問した。

「おかあさんなんでわたしをつれてかえったの？そのままにげればよかったのにやくそくだから？」

「約束とか関係ないわよ、赤ん坊のあなたをあのままにしておけなかったのよ」

マリアはギルティアを抱きしめ言った。

「でも、おかあさんわたしまおうのこなんでしょ？おかあさんのこじゃないんでしょ」

ギルティアはぽろぽろと泣きながら言った。

「違う！ギルはお母さんの娘なの！分かった？」

マリアはギルティアをさらに強く抱きしめ言い切った。

鈍感勇者

マリアはギルティアの最上級魔族としての力に強力な封印魔法をかけた。

封印には強力な魔力を有したため封印後、マリアは白魔導師としての力を使い果たしてしまい現在魔法は使えなくなった。

—— 現在 ——

「ギルティアく待ってくれ！」

アレンはギルティアの後を追ってきた。

「何だ？ 稽古は私の勝ちで終わったはずだろ、アレンはリリーの所にもいけばいいだろ」

ギルティアはぶっきらぼうに言った。

「何故リリーの所に行かないといけないんだ？
僕はギルティアに用事があるのに」

アレンは不思議そうに言った。

（駄目だ駄目だ！喜んだりしてはいけない）

とギルティアは思わずにやけている自分の頬をぺちぺちと叩きながら自分に言い聞かせた。

「ギルティア聞ってる？」

「すまない。聞いてなかった悪いがもう一度言ってくれるか？」

ギルティアは気を取り直していつもと同じようにアレンに接した。

「だから、一緒に来てと言ったんだ。」

そう言つてアレンはギルティアの手首をつかみ連れていった。

ギルティアはアレンに自分たちの生まれ育った村、カルバディンの村長の家に連れて行かれた。

ギルティアはアレンに手首を握られた事で、別の世界に暫く旅立っていたようだが無事生還したようだ。

「なっ、何をしようとしているんだ」

ギルティアはアレンの手をふりほどき言った。

「何って魔王討伐の会議に決まっているだろ」

アレンは真剣な表情で答えた。

「僕たちはこれからお父さんたちでも成し遂げられなかった魔王討伐をするんだよ。」

「そうだったな悪かったさあ早速会議をはじめよう」

ギルティアはぶっきらぼうに言い、そそくさと村長宅に入って行った。

「なんでいきなり不機嫌になったんだ？」

鈍感な勇者アレンは不思議そうに独りつぶやいた。

魔王討伐会議

村長に部屋通され、部屋の中を見回すとすでに仲間の皆と前勇者一行は揃っていた。

「遅いわよメスゴリラ！アレン様に迷惑かけないでよ」

リリーはギルティアが入ってくるなり言った。

「駄目だろリリーこれから一緒に旅をする仲間にそんなことを言っちゃあ」

「ごめんなさい！！アレン様でも、メスゴリラが悪いんですよ」

リリーはアレンに甘えた声で言った。

「会議のことを忘れていた私が悪いんだ。」

ギルティアは何かを言おうとしたアレンを遮り言った。

「それでは皆さんが揃ったので会議を始めましょう」

話を進めたのは黒魔導師のジェインだった。

「僕たちは幼い頃から一緒に修行をしてきました。それは何のためですか魔王を討伐するためですよ！つまらないことで仲間割れしないでください」

ジェインの言葉で一同は黙った。

魔王討伐会議は3時間に渡り行われた。

会議によって決まったことは3つ。

一つは魔王の13人いる子供全てを殺すこと。

これはアレンの父親の提案だ。アレンの父前勇者はギルティアが魔王の子供だと言うことを知らない。

アンがギルティアをおいて行ったことを知っているのはマリアだけだった。

マリア以外は気絶していたらしくアンの回復魔法で復活したマリアは他の仲間を町に連れ戻した。

マリアはその提案が上げられたときは生きた心地がしなかったが張本人のギルティアが一番落ち着いているので何も言わなかった・・・言えなかった。

二つ目は聖なる魔武器を集めることだ。聖なる魔武器は光の魔法の力を高める効果と邪悪な魔力を喰らう効果がある。

要は、聖なる魔武器は魔族の側にあるだけでその邪悪な魔力を喰らい殺す事が出来るし、少し傷を付けるだけでも致命傷を与える事が出来る・・・らしい

3つ目は死なない事と決して仲間を裏切らない事だ。

以上3つが会議で決まったことだ。

そして、翌日。

勇者一行は村人や両親に見送られ旅だった。

血だまり

旅を初めて2週間、早くも勇者一行は魔王の10番目11番目の子供と戦っていた。

「兄ちゃんどうしよう・・・こいつら人間のくせに強いよ・・・」

11番目の子供ゼムが双子の兄ロムに言った。

「大丈夫だ僕たちには必殺技があるじゃん」

10番目の子供ロムはそう言い詠唱し始めた。

ゼムもそれに習い詠唱を始める。

「やばいです何かをするつもりですよ！」

ジェインは焦った様子で口早に言ったが、間に合わなかった。

ゼムとロムの詠唱は終わり魔法が発動する・・・

その瞬間黒い霧が辺り一面に広がったが、それだけで別に何も起こらない。

「みんな無事か？」

ギルティアは、仲間に声をかけたが返事がない、不思議に思い耳を澄ませるとうめき声が聞こえてきた。

ギルティアは急いで声の方に近づいた。

「アレン！リリー！ジェイン！大丈夫か！？」

三人は地面に突っ伏して動かない・・・

三人の顔色は死人のように青白く呼吸も浅く意識もない。

「アレン達に何をした！」

ギルティアは叫んだ。

「あれ？兄ちゃんおかしいよ僕たちの必殺技が効かない人間がいるよ」

ゼムは泣きそうな顔で言った。

「嘘だろ！効かないはずがないんだこれは僕たち兄弟やパパ以外には猛毒なんだぞ死ぬはずなんだ！効かないはずがない」

ロムは焦っているがその声はギルティアの耳には届いていない。

ギルティアは完全に思考停止状態に陥っていた。

目の前に苦しそうに倒れている仲間達に何も出来ない

このままでは確実に数分と経たずに死んでしまうだろう

仲間にもしてあげることが出来ない自分・・・

「うわあああああ」

気がついたら目の前は血の海だった。

ゼムの手足はちぎれかろうじで生きているようだがもう虫の息だ。
ロムの頭がギルティアの足下に転がっている、一目見て死んでいる
ことが確認できた。

「何だ？何が起った・・・」

ギルティアには何が起ったか全くわからなかった。

辺りを見回すと先ほど居た場所と全く違う場所にいる。

「な・・・んで僕たちを・・・殺すの？おね・えちゃん」

ゼムはそう言い息絶えた。

何故そんなことを言われたのか意味が分からなかったが、ふと血だ
まりを2見、全てを理解した。

そこに写っていたのは人間ではなく魔族だった。

制御不能

「そうだ・・・そうだった私は人間じゃなかったんだった」

ギルティアは泣きそうな声で呟いた。

認めたくなかった、だから忘れようとしていた自分が魔族だということ・・・

認めたら心まで魔族になってしまう、でも私はやってしまった我を忘れて暴れてしまった。

自分で自分の力を制御できなかった、そればかりか暴れている間の記憶さえない。

もしかしたらアレン達もこの魔王の息子達みたいに殺してしまったのではないかと考えてしまうと自分が怖くなった。

（大丈夫皆は生きているはずだ、大丈夫）

ギルティアはそう自分に言い聞かせた。

「どちらにせよもう皆の所には戻れないな・・・」

ギルティアは血だまりに写る自分を見、そう呟いた。

”ドスッ”

いきなり背後からの攻撃でギルティアは地面に膝をついた。

「なっ……何を!!」

ギルティアは振り返った。

「ギルティアを返せ!」

アレン達だった、ボロボロになりながらも剣を構えている。

「そうよ返してよあんなゴリラでも私たちには必要なんだから、返してよ!!」

リリーは泣きながら叫んだ。

「ギルティアを返してください」

ジェインもすごい剣幕で言った。

（良かった皆生きてたんだ）

ギルティアにホッと息をつく暇などアレン達は与え無かった、次々と攻撃していく。

ギルティアはその場から逃げ出すことしか出来なかった。

逃げ

ギルティアは仲間の攻撃から逃げきった。

このままの姿では戻っても殺されるだけ、そう思ったギルティアは人間の姿になるために母の元へ戻ることにした。

（私は空が飛べたんだな）

今ギルティアは漆黒の翼を羽ばたかせ空を凄いスピードで飛んでいる。

このまま行けば数分で村へ着く。

ギルティアは自分の魔族としての能力がどれほどあるのか全く分かっていない。

空を飛んだのだってジェインの攻撃を必死で避けていたら飛んでいたのだ。

だからこそ自分が怖い、ギルティアは力を封印されていた時でさえ勇者との剣の稽古などは手加減していた。

今人間と戦ったらあの子達みたいに殺してしまう・・・

ギルティアは自らの手で殺した弟達のことを考えるといたたまれなくなった。

考えているうちに村に着いた、こっそりバレないように細心の注意

をはらって母の家にたどり着いた。

「ただいまお母さん、大変なんだ助けて」

”バン バン バン
”

銃声が鳴り響く

バロン

ギルティアはすべての銃弾を避けた。

「おまえは魔族だな！残念だったな勇者達はすでに出発した」

ギルティアに撃ったのはアレンの父親前勇者であるバロンだった。

部屋を見渡すとバロンの後ろに母親の MARIA が驚いた様子で見ていた。

バロンは攻撃を繰り返そうとした時に MARIA に後ろから殴られ気絶した。

「お帰りギル、早い帰りだと思ったら封印が解けたのね私の力が復活したからそろそろくる頃だと思っていたのだけれど邪魔がはいったわね」

そう言うと MARIA はバロンの頭を憎々しげに軽く蹴った。

「お母さん、私を元に戻して」

ギルティアは母に頼み込んだが、

「それがあなたの本当の姿よ、それに母さんはもうギルティアの力を封印出来るだけの力はないわ」

「そんなあ私はどうすればいいのですか？」

「まあとりあえず自分の力を制御することを覚えましょう話はそれからだわ」

マリアは微笑みながら言った。

「そんな時間はありません、ここにはアレン達に黙ってきているのです早く合流しないといけません」

「大丈夫大丈夫、お母さんが昔作った異空間ですればいいの、そこで過ごす時間は現実世界では時間が止まっているから」

マリアは軽くそう言い、ギルティアを異空間へと連れて行くこうとした。

「バロンさんはあのままにして大丈夫なのですか？」

「いいのいいの、あいつアレン達がなくなったとたん私に関係を迫ってきたのよいい年してどうかしているわ」

マリアは心底呆れたという様子で言った。

「えっそうなのですか？確かにバロンさんの奥さんは亡くなっているんじゃないですが」

「そんなのは気にしなくていいのよ早く始めるわよ」

母は強い

「お母さんって強かったんですね」

ギルティア達は異空間での修行を終え部屋に戻っていた。

「そうよ、お母さん実は強かったの。お母さんが教えた魔法忘れず使ってたね」

「はい、これでアレン達の所に戻れます。でも、良いのでしょうかアレン達をだます形になります」

ギルティアは不安そうに言った。

「なに言ってるの嘘は前からついているでしょう。それにバレなきゃ良いのよ」

マリアは満面の笑みで答えた。

ギルティアはこの人だけは敵にまわしたくないなと思った。

「問題はこいつが決めたことよ」

マリアは足下に転がっているバロンをまた蹴った。

「うつ・・・やめ」

Baron は マリア の 蹴 り で 目 覚 め た。

「 起 き た の な ら 帰 っ て く だ さ い ! 」

マリア は Baron に 強 い 口 調 で 言 っ た。

「 マリア 今 こ こ に 魔 族 が 居 た ん だ ! 」

「 そ ん な の は 気 の せ い で す よ 」

マリア は 呆 れ た よ う に 言 っ た。

「 ん ? ギルティア 帰 っ て い た の か ? 」

Baron は ギルティア に 気 づ き 言 っ た。

ギルティア は 異 空 間 で の 修 行 で 自 分 の 姿 を 好 き な 形 に 出 来 る 魔 法 を
 マリア から 教 わ っ て い た。

「 はい、アレン達とはぐれたのでここに帰れば居るのではないかと
 思 っ た の で す が 」

「 この 町 に は 誰 も 帰 っ て い な い、元 の 場 所 に 戻 っ た 方 が 良 い の で は
 な い か ? 」

Baron は マリア に 蹴 ら れ た 頭 を 押 さ え な が ら 言 っ た。

「 はい、では早速そうしてみます。お母さんありがとう行ってきま

す
」

「はい、行ってらっしゃい、困ったらいつでも母さんが付いてるか
ら」

ギルティアは大急ぎで元の場所に向かった。

合流

ギルティアは自分の姿を隠す魔法をマリアに教わっていったためその魔法を使い空を飛び皆とはぐれた場所に着いた。

地面に血のあとがベッタリと付いている、それだけで他にはなにも見あたらない。

「アレン、リリー、ジェイン」

叫んでみたが返事はない、ギルティアはどうすることも出来ずその場に座り込む。

（やばい眠気が・・・）

ギルティアは眠気に勝てずにそのまま眠ってしまった。

目覚めると顔の目と鼻の先にアレンの顔があった。

「うわあああゝ」

ギルティアはつい力を込めてアレンを突き飛ばしてしまった。

”ドンッガラッガッシャン”

派手な音が辺りに響く。

「なにするんだ」

ギルティアは驚いた様子で言った声が少し震えている。

「それはこっちのセリフよ、メスゴリラ」

すごく嬉しそうにリリーは言った。

「リリー、ん？ここは何処だ？」

ギルティアはリリーに訪ねた。

「僕にはなにも言うことはないのか？ギルティア」

アレンはよろよろと立ち上がりながらギルティアに向かって言った。

「アレン！すまない驚いたのだな」

「あやまったからもう良いよ、それにしても良かった。そんなことは無いのは分かってたけどギルティアが死んじやったんじゃないかと心配だったんだよ」

アレンは泣きそうな顔で言った。

（まいったなあ、気持ちが揺らいでしまうやめてくれ）

ギルティアは自分の気持ちを押さえ込んだ。

「そうよ私たちが目覚めるとあんたと魔王の子供達はいないし・・・心配したんだからね」

最後の方は小声で聞こえにくかったがギルティアはしっかり聞いた。

「ありがとう心配してくれて」

「バカ！し心配なんかしてないわよメスゴリラのくせになに言ってるのよ」

リリーはブツブツ文句を言っている「

「あのー僕のこと忘れていませんか？」

ジェインは寂しそうに言った。

嘘

「別に忘れたわけではない」

「そうよ、ただ影が薄かったただけなんだから」

ギルティアとリリーはフォローをしたが、リリーのは傷口に塩を塗っていた。

「僕だって心配しましたよ、ギルティアさんが居なかったのでみんなで探したんですよ。そしたら魔族同士殺し合いをしていたんですよ。僕たちと戦っていた魔王の子供を殺した魔族は何故かギルティアさんの剣を持っていたので、殺されたんじゃないかと・・・」

ジェインは泣きそうになりながら言った。

「そうよ、目覚めたら私たちしか居なかったしギルティアあんだどこに行っていたのよ？」

リリーは不思議そうに言った。

「私もよくわかっていないんだ、気が付いたらあそこにいた」

ギルティアは嘘をついた。

「ふーん、そうあんながそういうなら信じてあげる」

リリーはギルティアの嘘に気づいていたようだった。

ギルティア達は宿屋を出た。

「こんな所に町があつたのだな」

「運が良かったよ、天は僕たちに味方しているよ」

アレンが笑顔で言った。

「これからどうしますか？僕たちがやったわけではないですが、魔王の子供2人死んだ。大きな進歩ですよ」

ジェインは鼻息荒く言い次に行こうと張り切りだした。

「ジェイン、落ち着け調子に乗ると痛い目にあうぞ」

ギルティアはジェインの方に手を置き落ち着かせようとした。

「！？」

ギルティアは触れてすぐ手を引つ込めた。

「どうかしましたか？」

ジェインは不思議そうに言う。

「ジェイン、いや何でもない気にするな」

ギルティアはそうは言ったものの内心混乱していた。

（どうしてなんだ？何故ジェインも魔族なんだ？）

ジェインの謎

ギルティアは封印が解けたことで魔の力を敏感に感じることが出来るようになっていた、ギルティアはそのおかげで自分の魔王族としての力がいかに強いかわ覚させられることとなり嫌だった。

だが、遠くにいる魔物や魔族、魔王族がどこにいるかが分かり便利だとも思っていた。

（触れるまで気づかないなんてジェインは何者なんだ？）

それから数日、何事もなく旅は続いた。

魔王族の情報を集め、魔王の子供達を殺す。

正直ギルティアは自分の兄弟を殺すのは嫌だ。

ギルティアは自分の弟達を殺したことを悔やんでいた、いくら我を忘れていたと言え、仲間を守るためとは言え自分の実の弟を殺してしまった。

死ぬ間際のおねえちゃんという声が耳にこびり付いて離れない。

「どうしたんだ？ギルティア、顔色が悪いぞ」

アレンが心配そうにギルティアの顔をのぞき込む。

「大丈夫だ、心配するようなことではない」

ギルティアはアレンを安心させるように笑った。

「・・・わかった、ギルティアが言うのなら僕は何も言わない、
だけど本当につらかったりしたら力になりたいから相談してくれ」

アレンは納得できない顔をしていたがそれ以上何も言わないでいた。

「みなさん良い情報を得ることが出来ました、魔王の5番目の子供の
情報です。どうやら娘みたいですが、ノルトスにいるらしいです」

ジェインが聞き込みから帰ってきた。

「ノルトス？何故そんなところにいるのよあそこはのどかな村よそ
んなわけないでしょ」

リリーは呆れたように言った。

「本当です。今は実害が出ていないのでなにもしていないらしいの
ですが」

ギルティアはここ数日の旅でジェインのことは何も言わないことに
決めた。

（ジェインだって何か事情が有るはずだそれに自分だって人のこと

は言えない)

ギルティアはそう考えていた。

「とにかく行ってみよう行ってみて魔王の子供だったら戦えばいい」

アレンがそついい早速一行はノルトスに向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6719x/>

恋する魔剣士

2011年11月29日22時56分発行